

4. 療育プログラム活動と親および スタッフのふりかえり

あひるくらぶ発足時から現在（2015年12月時点）に至るまで、あひるくらぶで活動された修了生や、現在もスタッフとして、またOG・OBとして活動してくださっているみなさんの声をアンケートにて集めました。また子どもたちの家族の方々からも、アンケートおよびインタビューにて思いを聞かせていただきました。以下、みなさんの声を紹介していきたいと思います。

I：スタッフへのアンケート

(1) 対象者と活動時期

- 1) 前期スタッフ：2003年度～2006年度（2003年4月～2007年3月）6名
- 2) 中期スタッフ：2007年度～2012年度（2007年4月～2013年3月）5名
- 3) 後期スタッフ：2013年度～2015年度（2013年4月～2015年12月現在）7名

あひるくらぶの活動経歴を、上記の通り前期、中期、後期にわけ、各期から数名ずつスタッフを指名した。指名したスタッフには、①修了生、②修了生であり、現在もOB・OGとして活動に携わるスタッフ、③現在もアドバイザー的に関わってくださっているスタッフが含まれる。アンケートは計18人から回答を得た。

(2) アンケートの実施と質問内容

アンケートは2015年11月にメールにて対象者に配布し、メールにて回収をおこなった。アンケートの内容は、あひるくらぶ参加の動機や当時の思いを中心に聞き取った。前期スタッフのみ、あひるくらぶ発足時あるいは発足直後の時期の特徴を聞きとることを目的に内容を焦点化した。実際のアンケート項目は下記の通りである。

1) 前期スタッフ

- ①あひるくらぶの初期にたずさわられた時の動機やきっかけについて教えてください。また、当時どのような活動を行いたいと考えていましたか？ご自由にお書きください。
- ②子どもたちとの思い出や印象深いエピソードがあれば教えてください。
- ③あひるくらぶの初期の活動で、苦勞されたこと、がんばったことなど、ご自

身にとって忘れられないエピソードがあれば教えてください。

- ④あひるくらぶの初期の活動を通して「学んだこと」があれば教えてください。
- ⑤その他（ご自由にお書きください）

2) 中期スタッフ・後期スタッフ

- ①あひるくらぶに入ろうと思った動機やきっかけを教えてください。また、どのような活動を行いたいと考えていましたか？ご自由にお書きください。
- ②子どもたちとの思い出や印象深いエピソードを教えてください。
- ③あひるくらぶの中期（後期）の活動で、苦労されたこと、がんばったことなど、ご自身にとって忘れられないエピソードがあれば教えてください。
- ④あひるくらぶ中期（後期）での活動を通して「学んだこと」があれば教えてください。
- ⑤その他（ご自由にお書きください）。

(3) アンケート結果（スタッフの声）

アンケートの質問ごとの回答内容を抜粋して紹介する。またスタッフの声から、時期ごとのスタッフの思いや活動の特徴について簡単に考察を行う。なお、回答者の所属は、活動当時の所属と名称を採用し、幼児グループは（幼）、学童グループは（学）、Aグループは（A）、Bグループは（B）、Cグループは（C）、きょうだいグループは（兄）、親の会は（親）、その他は（X）と表記する。所属が2つ以上ある場合には並べて表記する。

1) 前期スタッフ

- ①あひるくらぶの初期にたずさわられた時の動機やきっかけについて教えてください。また、当時どのような活動を行いたいと考えていましたか？ご自由にお書きください。

〔幼〕：あひるくらぶの開始にあたって荒木先生よりお誘いがあったので参加しました。保護者の方の安心できる場所と仲間づくり、子どもたちにとっても同じ、安心できる場と仲間づくり、それから個々の子どもたちが暮らしの中で障害によって暮らしが不自由にならないように、毎日を気持ちよく過ごせる力を少しでもつけていってもらえればというねらいをもった活動を意識していました。月に一回の活動なので、何よりも大事なことは一人一人にとって楽しい時間で

あることだと考えていました。

(幼)・(親): プレイセラピーに来られていたお母さん2名が、子どもたちが思いっきり遊べる場と同じ立場の親が交流できる場が欲しいという話をされた時に、一緒に立ち上げることになった。子ども2名からのスタートで、同じような思いをもっている子ども・親を加えながら、子どもも親もそしてスタッフも安心して楽しめる場(活動)を行っていきたくと、話し合いの場を大切にしながら、学生と親が連絡を密に取りながら、活動の環境、道具、必要なものをそろえながら、準備をしていた。

(学)・(親): プレイセラピーからの関わりの延長として自然に「あひるくらぶ」のスタッフになりました。1対1で関わることの多いプレイセラピーとは違って、「あひるくらぶ」では子ども集団の中で様々なやりとりが生まれます。そのような「あひるくらぶ」ならではの環境を生かして、子どもたちが安心して、子どもたち同士で遊び込むことができるような活動をつくっていきたくと考えていました。

(幼)・(学)・(兄): 集団が苦手な子どもを募って集団で活動するという一見矛盾した取り組みの中、「苦手だけど嫌いではない」「苦手だけど関心はある」といった点を大事にしつつ、苦手だから大事にするという克服志向型ではない方向性を目指したいと思っていました。

②子どもたちとの思い出や印象深いエピソードがあれば教えてください。

(幼): ○Kくん・自閉的傾向が強く毎回ほとんどスタッフとの関わりのみで、エレベーターが大好きだったとき。一人でエレベーターに乗ったり、紙に書いたり、ひとりの世界で楽しんでいたKくんが、他の子たちがお店屋さんごっここの活動をする際に大きな段ボールのエレベーターを用意したところ、とても喜び他のこどもやスタッフと一緒に乗せて楽しむようになり、それをきっかけにあひるでの彼の世界が大きく広がったことを感じた時がありました。○Sくん・あひるに通い始めた最初、場所への抵抗が強く、部屋になかなか入らず、廊下で遊んでいたSくん、好きな電車を手掛かりに線路を描いて遊んでいるところから部屋へと、少しずつ線路を伸ばしてつなげると、彼の気持ちもつながっていったようで、それから徐々に部屋に入れるようになったことがあ

りました。

このふたつの事例からは子どもの興味や関心を大事にしながら活動内容を考え、環境を整えつつ待つことの大切さを教えてもらいました。

(幼)・(親):小麦粉、卵などの食物アレルギーのある子がいたので、おやつで食べられないものがあるときは、代わりのものを用意するなど、おやつには配慮をしていた。クリスマス会の話し合いをする中で、普通のケーキは食べられないが、その子だけ別の物を用意するのではなく、少し値段が上がるが、小麦粉、卵などを使用していないホールケーキを注文してみんな同じものを食べてはどうかという話が親の会で上がり、相談をして、そのようにすることに決まった。保育園でも一人だけ別の物を食べていたというその子は、当日、みんなと一緒にホールケーキを囲み、ローソクの火を消し、そこから分けてもらったケーキをととても嬉しそうに見つめ、「おいしい！」と最高の笑顔を見せてくれた。また、その子をととても嬉しそうに見ていたお母さんから涙がこぼれていたのを見て、一人ひとりへの配慮もとても大切だが、みんなで一緒にできるように工夫することも大切だと感じた。

(学)・(親):時々ふらっと集団から離れていってしまうAくん。私はそんなAくんの対応をしていました。集団に戻さないと！と私が躍起になっている時は頑なに拒否し、逃げて行ってしまうAくん。ある時、集団に戻そうとすることをあきらめて、二人でカーペットの上をゴロゴロ転がったり、芝生をパラパラしながら集団遊びを傍らから一緒に眺めていたり…ゆっくり、じっくりと二人の時間をある程度過ごす、Aくんは自分からずっと集団遊びに入っていました。心の発動機は子どもの中にあるということ、一定の距離を保ちながら子どもを信じて待つことの大切さをAくんから学ぶことができました。

(X):Aグループの子どもたちの成長を見ているとその歴史の長さを改めて思われます。それは同時に親御さん達のたゆまない苦勞の連続であったろうと思います。子ども時代に十数年にわたってずっとお互いにつきあっているような仲間・集団があるだろうか。そのことだけでもあひるの意義は充分にあるように思われます。すでに退会された親子も何組かいらっしやいます。時々思い出します、一体あの親子は今どうしているのだろうと。

③あひるくらぶの初期の活動で、苦勞されたこと、がんばったことなど、ご自身にとって忘れられないエピソードがあれば教えて下さい。

(幼)・(親):当初、あひるくらぶの活動は2人からの始まりでしたが、徐々に参加する子どもやきょうだいの人数が増え、それぞれの子どもさんに合う活動を考えることに非常に苦勞しました。しかし、その活動を通して、考えていた以上にうまくいかなかったり、逆に子どもたちがすごく喜んでくれたりするなかで、実践というのはこういうことで、頭の中で考えているだけでは発展しない、子どもたちからの個性やアイデアから活動内容が発展し、深まっていくことを学ぶことができました。

(学)・(親):学童グループでは「ごっこ遊び」を通して子どもたちにドキドキ、ワクワク感を味わってもらうために、子どもたちがどうしたら本気で「ごっこ」の世界に浸ってくれるかを、スタッフみんなで連日真剣に話し合いました。また、コスチュームやアイテムづくりなど舞台の装置となる様々な大道具や小道具を夜遅くまで大学に残って作りました。とても大変でしたが、差し入れを食べながら研究の悩みなど、色々な話をしながら過ごしたあの時間は忘れられません。当日、子どもたちが本気で遊び込んでくれた時には“やった”と心の中でガッツポーズをしたものです。

(幼)・(学)・(兄):土台となるプログラムが一切ありませんでしたので、活動の流れをどうするか、何を大事にするのか等、たくさんの時間をかけて議論し準備を進めていました。一緒に活動を共にしてくれる院生や学部生の存在なしには準備も実施もできませんでしたが、そうした院生や学部生の気持ちを大事にしたり励ましたりすることが十分にできていなかったこともあり今でも反省している点です。あひるくらぶを通じて経験した集団での実践や研究は、今の仕事をしていく上で大きな糧になっています。

(X):このときから子どもたちにとって楽しい場所、居場所になるような活動内容にすることが一貫して追求されていました。しかし、現実には月1回の活動のため、また院生スタッフもさまざまな活動や研究等の合間にその内容をどうするか、一人ひとりの子どもについて、その子にとって何をすべきか、何が足りないのかなど本当にいろいろな機会を捉えて議論したり見直しをしたりしていました。そして、その月1回の活動を全力で行っていたように思います。

月に1回だからこそとても大事にしていたのでしょう。そのような努力の姿を見るにつけ、私は、親御さんにきちんとこのような努力の姿を伝えたいと考えていました。その意味で、2005年度は親の会での活動となり、いくつかの課題と共にスタッフのこの目に見えない活動を何とか伝えるように意識してきました。

④あひるくらぶの初期の活動を通して「学んだこと」があれば教えてください。

(幼):長年療育の現場で働いてきましたが、現場は生活の場でもあり、スタッフの人数も限られているのでなかなかじっくり待つこともできず、ジレンマに悩みながらの毎日でした。あひるの活動の中では(もちろん生活のリズムは大事ですが)子どもの気持ちに重点を置くことができ、子どもたちも全面的に受け止めてもらえる安心感があるのではないかと思います。

(幼)・(親):あひるくらぶを通して、学んだことは非常に多くあります。特に発達相談の仕事始めてから、振り返るとあひるくらぶのなかで大切なことをたくさん学ばせて頂いたと感じることが多いです。

まず子どもたちから学んだことは1つの活動でも活動の参加の仕方、活動の楽しみ方、友達とのかかわりの中で感じる事、不快に感じる事など1人ずつ違い、1人ずつその感じ方が違っていても良い活動を作っていくことが非常に重要だということです。どうしても普段過ごしている保育所や幼稚園、学校などでは、目標や達成すべきことなどが決められていて、それに対して「できる」「できない」という評価をされがちです。またどうしても集団に合わせることを強いられ、子ども自身、個性を発揮できる場が少ないように感じます。

あひるくらぶは、子どもたちが日常の息苦しい活動から解放されて、1人1人が個性を発揮し、楽しめる場であり、また安心して子ども同士が気持ちをぶつけ合える仲間関係を育める場であったと思います。あひるくらぶのような場はなかなか地域で作れていないのが現状で、自分が働いている地域でも、このような場や活動を展開していく必要があると感じています。

次に保護者の方から学んだことも多くありました。最近は社会的に発達障害についての理解も徐々に進んできていますが、当時は適切に診断を行える医療機関も少なく、周囲の理解も進んでおらず、福祉制度もあまりないなかでの子育ては非常に大変なものだということを、保護者会の中で知ることができまし

た。

仕事に就いてからも同じように、自閉症スペクトラムやそのグレーゾーンの子どもの保護者で、周囲からのサポートも多くもらえず、孤立して育児をされている保護者に会うことも多くありました。当時は同じ悩みをもつ保護者の居場所がなかったので、なんとか保護者同士が集える場所ができないかと思っていました。そんな時、市で子育て支援センターを立ち上げが決まり、現場の先生と問題意識を共有しながら、保護者の居場所づくりに携わることができました。その立ち上げを推し進められたのは、あひるくらぶの保護者会で、保護者にも仲間が必要であり、その中で育児の相談をしたり、悩みを共有したり、情報を得る機会があることが非常に大切だということを知ることができていたからだと思います。

あひるくらぶで出会った仲間やその中で学ばせて頂いたことは私自身の財産であり、今の仕事にも強く影響を与えていると思います。あひるくらぶに参加させてもらえて、本当に良かったと感じています。

(学)・(親)：新しい取り組みということもあって、最初は全てが試行錯誤でした。その中で大切だったことは「子どもがどうしたいのか」「子どもはどう感じているのか」を常にスタッフ間で考え、まずは子どもの実態からスタートすることだったと思います。また、勘や経験に頼るだけではなく、子どもたちの心を動かす仕掛けや遊びの構造などを常に考えることの大切さを学びました。このような学びは、現在、療育や特別支援学校での活動づくりにも大変役立っています。

(幼)・(学)・(兄)：活動を始めたばかりの頃は、用意した遊びの中で子どもが予想したように遊んでくれることが目標になっていました。学童のグループができて数年経過したころからは、用意した場面で子どもたちが見せてくれる思いもしない姿を楽しみにできるようになりました。子ども自らが考え、その子の良さが発揮される余白を活動の中にどう設定しておくかを学ぶことになりました。

⑤その他（ご自由にお書きください）

(幼)：あひるの活動に最初から関わらせてもらって本当に嬉しく思っています。

す。また、子どもたちの成長と共に二年間の活動の中で院生のスタッフが大きく成長していかれる姿をいつも頼もしく感じています。長い期間子どもたちを見ていることで成長をじっくりと見せてもらうことができ、楽しみです。願わくば、この先もずっと・・大人になった人たちも、必要な時に安心できる場所としてのあひるもできたらいいなと思っています。

(幼)・(親): 最近、年長グループの映画製作の実践発表を聞かせていただく機会があり、小さかった子どもたちが1人1人立派に成長し、かけがえのない仲間・人とのつながりがあひるくらぶの活動を通して作り上げられていることに感動しました。あひるくらぶという活動を通して、子どもたち・きょうだい・学生・保護者・先生等が、様々な活動と一緒に体験して、時間を共有し、関係性を積み重ねていくことが非常に大切なことだと実感しています。その活動に自分が少しでも携われて、仲間の輪に入れて頂いていることをうれしく感じます。

(幼)・(学)・(兄): 活動を始めた2003年当時は、まだ感覚の鈍感さや敏感さとそれに関連する体の不器用さ、さらには学習での困難(読み・書き・計算)は、その存在に気づきつつ十分な対応ができていなかったと思います。今も自閉症スペクトラムの子どもたちに直接・間接に関わる機会がありますので、あひるくらぶでの実践を通じて学んだことはかけがえのない財産になっています。

小考察

前期グループはあひるくらぶの組織、遊びの活動内容の礎を築く時期であり、試行錯誤の苦労がうかがえる。同時に、多くの時間や労力が子どもたちの手応えにつながった喜びも感じられる。また現在となっては「あたりまえ」ともいえるような、発達段階への配慮や、個と集団の関係における子どもたちへの寄り添い、プログラムの流れなどもこの時期から大切にされていたことがわかる。

2) 中期スタッフ

①あひるくらぶに入ろうと思った動機やきっかけを教えてください。また、どのような活動を行いたいと考えていましたか? ご自由にお書きください。

(B): 荒木先生の紹介・小学校の学生ボランティアをしていて、学童期の発

達障害の子について実践しながら、学びたかったから。月1回、楽しんでもらえる活動になればと思った。仲間、友達を少しでも意識して、一緒に楽しいと思える時間になればいいなと思った。

(B): ゼミの先輩からお誘いがあったため。子どもたちと直接関われる機会がもてればと思っていました。

(C): 大学時代から発達障害のある子どもたちやその家族と関わるボランティアに参加していたので、最初はその延長のような気持ちでした。そのボランティアで子どもたちと上手くコミュニケーションがとれず、悩むこともあったので、子どもたちと一緒に遊びを楽しめるようになりたいと思ったこともあひるくらぶに入ろうと思ったきっかけです。最初は、このような活動を行いたいなど、考える余裕はなかったように思います。先輩や同期のみんなを見よう見真似で活動していました。

②子どもたちとの思い出や印象深いエピソードを教えてください。

(B): 活動中の思い出はたくさんあり書ききれませんが、活動前後の何の枠組みもない中で子どもたちとの自由遊び（部屋でかくれんぼしたり、外で追いかけてこしたり…）が、子どもたちにとってもスタッフにとってもお互い打ち解けあえる重要なものだったのかなと思います。また、子どもたちではないですが、親御さんがお子さんのことをスタッフに気軽に話してくださることがあり嬉しかったです。

エピソードとして印象に残っているのは、活動を通して子どもたち同士が関わり合う姿が印象に残っています。グループの活動のキーポイントでもある「友達と協力し合う」ということが、自然に見られたとき、とても嬉しく思いました。

(B): (部屋から部屋へ移動する場面で) あるお子さんが好きな電車を取り入れることで、運転手になりきって、いきいきとみんなを誘導していたこと。ちょうどそのくらいに、いつもエレベーターでの遊びに、どうぞと色んな人を受け入れて乗せてくれたこと。

(C): 月一回の活動ではあるものの、毎回わくわくしながら大学へと来てくれる子どもたちの姿がとても印象に残っています。ある時期、あひるの活動が

終わってから、子どもたちとスタッフ数人で大学内を探検するというのがブームになった時期がありました。Sくんは、自分なりの決め事があるために、大人が「もうおしまいにしよう」と声をかけてもなかなか終わることができなかったり、一方で新しいこと、怖いことへの不安も強いところがありました。しかし、何度か探検を重ね、みんなと相談しながら取り組む中で、自分の想いだけではなく、他の子が「今日はもう帰りたい」というと、その想いも受け止めてくれるようになりました。また、土曜の大学の建物内は電気がついておらず、真っ暗なところも多かったのですが、まるで「学校って静かで暗くて怖い…。でも、みんなで突破すると怖くない！」というように、仲間とともに怖い想いをわくわく感へと変えていったような姿がみられたことが印象的なエピソードです。

(C): 子どもたちと一緒に、大きな模造紙に何枚も何枚も道やお店を書いて、街をつくった活動があったと思います。子どもたちの世界がどんどん広がっていくので一緒に遊んでいて楽しかったです。また、「回送バスを描いて」と頼まれて描いたのですが、バスのなかに乗客を描いてしまい「乗れません（回送バスに乗客は乗らない）」と子どもに注意されたことは今も笑い話として残っています。

③あひるくらぶの中期の活動で、苦勞されたこと、がんばったことなど、ご自身にとって忘れられないエピソードがあれば教えて下さい。

(B): 今から考えると、工夫できることや事前に考えておくべきことなど、もっとできることがあったようにも思うが、その当時、学生同士でどうしたら参加児に遊びこんでもらえるかということを話し合ったことはとてもよい経験だったと思う。

(B): 年に1、2度あったまとめの機会のために、活動を資料にまとめることは、大変ではありましたが自分たちの活動を振り返る良い機会でした。

(C): まだまだ自分自身、発達についての知識も乏しく、どのようにすれば子どもたちが楽しんでくれるのか、毎回手探り状態の中で取り組んでいました。絵具を使った活動の時に、自分たちが思った方向へ遊びが展開せず、絵具のつけ合い、水の掛け合いのようになってしまい、活動が終わってからスタッフみ

んなで必死に室内を掃除したという失敗エピソードがあります。その反省から、子どもたちが楽しめる活動をつくるためには、自分たち大人が楽しいと思えるような活動にしなくてはいけないという検討をしました。しかし、楽しいと思えることをしようとせばするほど、準備が大変になり、週の大半、一日のほとんどがあひるの活動準備で追われていたように思います。それでも、少しでも楽しい保育をつくるために悩んだことは大変でもあり、良い経験になっています。

④あひるくらぶ中期での活動を通して「学んだこと」があれば教えてください。

(B)：・いかに楽しい雰囲気や設定を準備するか。影での子の動きや段取りも学べた。・ある時は、この子が。次回は、別の子が中心になって、集団をひっぱる機会をつくるのが大切かなと感じた。

(B)：ただ「楽しい」だけではなく、成長していく子どもたちの様子をしっかりと捉えながら活動を考えていく過程が毎回とても学びとなりました。活動を上げていく仲間たちやアドバイザーの先生方と、あーでもないこーでもないと試行錯誤し活動を練っていくこと、一つの活動を実現させるためにいろいろな人の意見や指摘を参考にしながら進めていく過程は、今の仕事にも役立っています。

(B)：準備の大切さや子どものことを話し合う時間の大切さ。

(C)：遊び方です。遊びの動線や展開の仕方、素材、道具の提示など、療育の視点を学びました。また、遊びのなかで育まれる子どもたちの豊かな表情やコミュニケーションの広がりも体感できました。これらの学びは、就職先（重症心身障害児施設）や看護学校（小児科実習）でも活かされています。

(C)：一人ひとりの発達状況、興味などを大切にしながらも、集団の渦をつくっていくことを目指していくこと、その大切さと難しさが一番の大きな学びです。そのためには、大人たちも集団の中で役割を確認し合い、チームとして活動に取り組んでいくことが必要であり、それら全ての学びが今の自分自身の仕事にもつながっていると思います。

⑤その他（ご自由にお書きください）

(B)：各活動を考えていくうえで、息詰まることもたびたびありました。グループの先生方だけでなく、荒木先生にも助言をいただきたい時もありましたが、なかなかできず…。今でも、あの頃やってきたことは、あれで良かったんだろうか？と思うことがあります。けれど、上記のように子どもたちの様子を捉えながら活動を考えて、準備して、子どもたちを出迎えて、反省会をして…という流れが、今の教師の仕事（授業作り）に活かされていると感じるときがあります。貴重な経験だったんだなと感謝しています。これからもあひるくらぶが、子どもたちや親御さんにとってはもちろんのこと、スタッフ一人ひとりにとっても、かけがえのない経験のできる場となりますように。

(B)：今、あひるにいた子ども達はどうしてるのか、とても気になります。

(C)：このアンケートを通して久しぶりにあひるくらぶのことを思い出しました。今の私自身の子どもたちに対する考え方や思いはあひるくらぶから始まっているなあと思います。いわば原点です。貴重な2年間でした。ありがとうございました。これからも応援しています。

(C)：あひるに参加した当初は、どちらかという“子どもたちのために”という想いが大きかったのではないかと思います。しかし、今となって感じることは、子どもたちからたくさんのことを教えてもらい、それが今の自分の働き方につながっているのだと思っています。

小考察

中期のスタッフにとって、あひるくらぶに参加する目的の一つが「学びの場」ともなっていることがわかる。また「先輩や同期のみんなを見よう見真似」という表現などからもわかるように、土台となる活動や接し方の着眼点が確立されてきていること、「影での人の動きや段取り」といった表現のように、これまでの活動を軸にしながら、より細部に配慮していることがわかる。これらから中期は、前期に築かれた土台をベースに学び、発展させてきたといえる。

3) 後期スタッフ

①あひるくらぶに入ろうと思った動機やきっかけを教えてください。また、どのような活動を行いたいと考えていましたか？ご自由にお書きください。

(A): 自閉症を持つ子どもに興味があり、特に、今まで関わったことのなかった中学生、高校生の支援をしたいと思い、入りました。支援者が考える支援方法だけでなく、当事者自身が考え楽しめるような活動を行いたいと考えていました。

(B): 学部生の時に、荒木先生から午後の“きょうだいグループ”に入らないかと誘ってもらったことがきっかけになった。元々、小学校の先生になりたいと考えていたので、良い経験になるのではと思い参加した。その後、応用人間科学研究科に入ることを決めたので、そのままあひるくらぶを続けようと思っていた。せっかくだったら“きょうだいグループ”と同じ年代のBに参加すれば、学部生の時の経験が生かせるのではと思い、Bに入ることを決めた。

(C): 学部時代には、誰とも学術的な議論を交わしたり、協力して活動を行ったりしたことがなかったので、大学院では他者と関わり合いながら何か活動を行いたいと考えていました。応用研に入ってすぐに行われたオリエンテーションでプロジェクトの説明を聞き、あひるくらぶの活動に興味をおぼえました。院生が主体となって活動プログラムを考え、月に一度、実際に子どもたちと関わりながらそのプログラムを実施するというのが、大変そうだけど充実しているように見えました。また、単に実践するだけでなく、会議で議論したり学会で発表したりしていると聞き、実践と学問をつないでアウトプットしているところが魅力的だと感じました。さらに私自身、昔から子どもが好きで割に関わるのが苦手だったので、その弱点を克服したいと思ったのもありました。

(C): 自身の研究である幼児の認知発達を考える際に、定型発達児だけでなく、発達障害児（特に自閉症スペクトラム児）についても示唆を得たいと思いました。その当時は、自閉症スペクトラム児の特徴や支援法に関する教科書的な知識しかもっていませんでしたので、実際に接してみたいという気持ちが大きく、あひるくらぶに入りました。あひるくらぶに参加する子どもたちが楽しめる活動を行いたいと考えていました。

②子どもたちとの思い出や印象深いエピソードを教えてください。

(A)：もっとも印象的なのは、新聞紙で遊ぶのプログラム。スタッフはあまり準備をせず、子どもたちに任せて実施した。子供たちがそれぞれに個性あふれる遊びを創作し、それを順に実行した。全員が楽しいと思えた活動だと思う。中でも、子ども対大人のチーム戦の遊びでは、子ども同士がお互いを励ましあい助け合い、ほほえましい様子が見れた。

(C)：あひるくらぶに参加していて、なかなか“楽しい”という思いが表に出てにくい子どもが、回数を重ねていくうちにだんだん自分の思いを表現できるようになってきた姿を見ることができたときは感激でした。

(C)：一時期、とても不安定な状態だった子がいました。「やりたくない」と言ってプログラムを拒否し、活動のために用意していた大道具を壊してしまい、活動を行いたいと主張する他の子と衝突しました。私たち大人も困り果て、やむを得ずその子を別室に隔離せざるを得ませんでした。その子の皆の元に戻りたがる様子を見て、一番苦しいのは子ども自身なのではないかと思いました。何とか皆で遊んでもらえるようにと、グループのスタッフで話し合いと試行錯誤を重ねました。結果的に、その子は再び皆と一緒に遊ぶことができるようになりました。プログラムを改良したのが影響したのかどうかは分かりませんが、少なくとも私たちスタッフはこのエピソードを通して、単に大人がさせたい／教えたいことを押し付けるのではなく、子どもたちの視点に立ち、彼らの意思を考慮してプログラムを考えるべきなのではないかという、大きな気づきを得ました。

(C)：ある月の活動で、いつもは室内でおこなうバルーン遊び（パラバルーンをみんなで持ち上下に揺らしたり、中にボールを入れて飛ばしたりする遊び）を屋外でおこないました。風が吹いているけれどもよくできるかな？ボールはどれくらい飛ぶかな？など子どもも大人もわくわくしながら活動したことを覚えています。いつもと同じ遊びでも、場所が変わるだけで新しい遊びのように楽しめるのだなという気づきを得た活動でもありました。

③あひるくらぶの後期の活動で、苦勞されたこと、がんばったことなど、ご自身にとって忘れられないエピソードがあれば教えて下さい。

(A)：活動を大人が決めすぎでは、子どもの自主性が失われるが、反対に自由度を大きくしすぎると、子ども達は何をしたらいいのかに迷ってしまうため、どの程度大人が決めて、どの程度自由度を保持しておくかが活動を考案するにあたって苦勞しました。

(A)：Aグループでプログラムをつくる上で難しかったことは、遊びが幼稚なものにならないかどうかという事でした。知的にもばらつきがあったので、簡単な遊びにしつつも、年齢に沿った遊びを提供することに苦難しました。また、プログラム中に、すぐにサポートに入ろうとしてしまう気持ちを抑えるのが大変でした。基本的には本人たちの自主性を育成することに焦点を当てていたため、こちらから何でも手を貸すというのは、控えようと努力しました。

(B)：学生同士で準備や話し合いの時間が合わず、1人のスタッフに負担がかかってしまったことが大変だった。

(B)：Bグループは、遊びに使う道具やストーリーが大切だと言われていたので、道具をできるだけたくさん使うようにしたり、本物に近いものにするのを意識して準備をした。また、ストーリーについても、できるだけわかりやすく、各ヤマの活動がつながるように展開を工夫した。

(C)：一対一の療育では気にしなくてもいいのですが、集団であるからこそ、介入すべき部分やしない方がいい部分を瞬間的に判断して関わるのが難しいなと感じます。

④あひるくらぶ後期での活動を通して「学んだこと」があれば教えてください。

(A)：あひるくらぶの活動を通して、見通しをたてることや、自由度が高い活動が苦手な子どもでも、適切なプログラムを組むことにより、一から自分でゲームを作ることができ、より自主的に、活発に活動に取り組めることを学んだ。また、障害者支援では、「構造化」や「視覚化」が重要とされているが、社会では支援体制が十分でない状況が多々あるため、過度な支援体制の中で生活するより、少しずつでも、子ども自身の力を伸ばすような取組みをしていく必要があることを感じた。

(A) : 子どもたちの力に任せ自分自身で作り実行することの大切さは、大きな学びになりました。自分の作ったもの、仲間の作ったものを大切にしようとする様子は大変興味深かったです。また、自分で作り、失敗する、成功する、という経験の大切さも教わったように思います。スタッフ目線ではどうしても、失敗ないようにサポートしたくなるものですが、子どもの力を信じ、失敗から学んでくれるようすを見せていただきました。

(B) : Bグループに入った時には、あそび（活動）の形がある程度決まっていたので、その決まった活動の形の意味や理由が分かるのに、時間がかかった“なぜヤマごとに活動場所を変えるのか”“そもそもなぜヤマが必要なのか”等）。療育経験者がいなかったということもあるかもしれないけれど、毎月の活動を考えるのに何度も話し合いをする必要があった。でも、結果的に何度も話し合いをすることで、スタッフ同士共通理解を持てたことや、意味や理由を捉えなおすことができたのは、「学び」だったと思う。

(C) : あひるくらぶに入って、実際に子どもたちと接しながら、その子たちのことを考えたプログラムを学術的な議論と結びつけて考えることが出来ました。心理学とは何か、自分が今後すべきことは何かを考える機会となりました。また、各種発表などにおいて実践したことを分析したりまとめたりする中で、自分たちの活動や、そのアウトカムとなる子どもたちの行動を改めて振り返り、考察することができました。あひるくらぶの活動を通して、学術的な議論と実践とのバランスのとり方が、少し分かったような気がします。

(C) : “子どもの目線と遊び心をもつ”ということ学びました。療育を考える際に、大人の目線を持つことももちろん大切ですが、子どもが何に興味を持ってくれるのか、何を楽しんでいるのかという子どもの目線をもつことで、活動自体を楽しめるものにできると考えます。また、活動や遊びの流れに沿いながらも、新たな流れをつくりだすような遊び心をもつことで、新鮮味のある活動ができ、より良い支援につなげることができるのではないかと考えます。

⑤その他（ご自由にお書きください）

(C) : あひるくらぶに参加できたことは私にとってとても良い機会になりました。毎回、どのようなテーマで子どもたちと遊ぶのか、どのような伏線を設

けるのかなど同じグループのメンバーと話し合いながら一緒に作り上げていくという経験は楽しい思い出だけではなく、仕事にも生かされるように思います。

小考察

後期はこれまでの枠組みを保持しつつ、新しい子どもの参加や、子どもたちの年齢、発達段階に応じて、既存の枠組みをあえて崩してみるような試みがみられた。また既存の枠組みのもつ意義を考えなおしたり、新たな枠組みを築き上げるような試行錯誤もみられた。さらにこの時期は学会発表、論文執筆など、これまでの活動を学術的にもまとめることで、学問と実践について考察したり、活動に活かしたりする時期でもあった。

(4) 総合考察

前期、中期、後期と時期ごとのスタッフの思いを紹介した。それぞれの時期に着目すると、前期はあひるくらぶの組織、活動内容、子どもたちへの寄り添い方等の礎を築き上げた時期、中期はこれを土台に、活動やスタッフの動き、子どもたちへの関わり方が深化した時期、後期はこれまでの伝統を引き継ぎつつも、子どもたちの年齢や発達段階の変化等に応じて活動の再構築を試みた時期と整理できるのではないだろうか。また、どの時期にも一貫していえることは、あひるくらぶはスタッフにとっても楽しく学びの深い活動であったこと、そしてここでの学びがそれぞれの現在の仕事等に大きな影響を与えているという点であった。

Ⅱ：保護者へのアンケートおよびインタビュー

(1) 対象者

2015年11月時点であひるくらぶ親の会に参加している保護者全員を対象とした。退会した保護者、休会中の保護者は対象としなかった。

- (1) Aグループ：3名(内、きょうだいグループ（あひるくらぶ参加児のきょうだい児によるグループ）を兼ねる保護者1名)
- (2) Bグループ：3名
- (3) Cグループ：2名
- (4) Dグループ：3名

なお、きょうだいで2つのグループに所属している場合は、双方のグループで、人数をカウントしているため、延べ人数での表記となっている。

また本章では、2015年11月時点でAグループは午後に活動していることから、「午後グループ」、Bグループ、Cグループ、Dグループは午前に活動していることから、「午前グループ」と区分する。この場合、午後グループは3名、午前グループは5名（きょうだいの重複は除外する）となる。

(2) アンケートおよびインタビューの実施と質問内容

午後グループと午前グループの1名は2015年11月に書面のアンケートを郵送にて配布、回収を行った。午前グループは同時期、立命館大学にて、インタビューによる聞き取りを実施した。インタビュー実施時間は2時間程度で、聞き取りは富井が主に進行し、荒木、松元が同席した。聞き取りの内容は、あひるくらぶ参加の動機や、現在の思いを中心に聞き取った。午後グループ、午前グループとも質問内容は同様であったが、午前グループは時間の制約上、一部の質問を割愛した。実際のアンケート項目は下記の通りである。

- ①あひるくらぶに入るにあたり、どのような期待や願いがありましたか？
また、そのような期待や願いはどれぐらいの達成度でしたか。ご自由にお書きください。
- ②お子さんにとって「あひるくらぶ」への参加によって、どのような変化があったと思われますか？よい点とわるい点など、ご自由にお書きください。
- ③ご家族やお子さんにとって「あひるくらぶ」の活動への参加はどのような

意義があるとお考えですか？ご自由にお書きください。

- ④「あひるくらぶ」での子どもたちの思い出や印象深いエピソードがあれば、教えてください。
- ⑤「あひるくらぶ」への、今後の期待がありましたら、自由にお書きください。
- ⑥回答者（お母さんまたはお父さん）にとって、子どもさんの将来の夢を教えてください。
- ⑦その他：ご自由にお書きください。

(3) アンケートおよびインタビュー結果

アンケートおよびインタビューの質問ごとの回答内容を抜粋して紹介し、簡単に考察する。なお、午前グループの内、インタビューでの聞き取りを行った保護者の発言は音声録音し、逐語録を作成した。ここでは逐語録からそのままの発言を抜粋し、「」で括って表記する。また、回答者の所属は、午後グループは (p)、午前グループは (a)、きょうだいグループは (兄) と表記する。所属が2つ以上ある場合には並べて表記する。

①あひるくらぶに入るにあたり、どのような期待や願いがありましたか？また、そのような期待や願いはどれぐらいの達成度でしたか。ご自由にお書きください。

(p)・(兄)：コミュニケーション能力の発達と安心して通える居場所の確保。長い間通ってきたので、目標は十分達したと思います。

(p)・(兄)：子どもに友達を作りたかった。あひるに入るまで他の人と行動を共にする事がなかったので、先生方やスタッフの方々の方々の力を借りて皆と一緒に出来た事が嬉しかったです。毎月あひるのある日を楽しみにしていました。

(p)：集団の中でモデルを見つけ、模倣して成長してほしいと願っていました。また集団の中でコミュニケーション力をつけて欲しいと期待していました。模倣力は元々弱く、まだ課題ですし、憧れる対象をみつけることもありませんので、期待通りではないですが、安心できるスタッフの方々や安心できる環境のおかげで他者への関わりを求め、意思伝達がうまくなりました。

(p): 就学と同時に市から受けていた療育が全くなくなることが不安でこちらに参加させていただきました。

(a): 「入ったときに普通の幼稚園に通っていて、健常者のなかで一人やりにくい子がいる感じだったので、同じような立場の子どもたちの中でのびのび遊べる機会が欲しいという思いもありましたし、親同士のコミュニケーションとか、悩みというのは、普通のお子さんを持っている親御さんでは話せないことがあって、そういうことをはなせる親御さんたちと知り合いになりたいというのがありました。」「達成度というのはどうなんかな、と思いますけど、楽しく行けて楽しく過ごせて、特にうちの子はインドアなんで、お外で遊んだりとか走り回ったりできる機会があるというのは助かっています。親の期待度からしたら100%というか、120%で、私たちもこうやって話せることでいろんなアドバイスもらったり、私もそんなことあった、みたいに慰めてもらったりとかもしたので、ほんとうに紹介してもらってよかったと思っています。」

(a): 「人に関心がなくてずっと物、おもちゃと遊んでいるような子で、回るものとかもずっとくるくるしているし、呼んでもあんまり反応のない子で、もちろん言葉もしゃべらないし、幼稚園とかいっても物と遊んでる物としか遊んでいない、ひどいときはそういう感じで、とりあえず会話ができるようになればなという感じで、そういう思いがあって。で、それも個性なのかなと思っていたときに判定を受けてもう私的にすごくショックで、どうしたらいいの、これ病気、というか障害だったんだって思っ。で、わらにもするような思いで、荒木先生のところへ、主人からお話させてもらって…」

(a): 「まず期待というのは、親の会で私も他の同じ悩みをもったおかあさんたちと話たいというのがすごく大きかったです。子どもにとっては、外にでると人と接して友だちと接して遊ぶ機会がほとんどないので、今X幼稚園にいかせていただいて、一応同じ年頃の子と過ごす時間はあるんですけども、やっぱり健常の子どもたちと過ごしていて、それなりにいいところいっぱいあるんですけど、でもやっぱりそうじゃない、そうじゃない子っていうのでx(子どもの名前)はすごく目立ってわかるので。そういう障害があるっていうことを前提に集まるというようなそういうところでも過ごす、他の子どもたちと一緒に過ごす必要があると思って。そういうところでは、あひるくらぶがいいとこ

ろだと思って期待をして、まだいるところかもしれません。』

②お子さんにとって「あひるくらぶ」への参加によって、どのような変化があったと思われますか？よい点とわるい点など、ご自由にお書きください。

(p)・(兄)：毎月のあひるの参加を楽しみにしています。とても穏やかです。自分から思っていることを少しずつ言うようになりました。言うことはまだまだですが、少しずつ多く話してくれるように、家でも雰囲気作りしています。なかなか兄弟関係はお互いに気になる存在で仲良くしている時間が短くケンカが耐えないので、一緒に行動することが出来ればと思います。

(p)：学校にいるときはなんとなく居心地が悪いけど、ここに来るとなんだか波長の合う友だちがいて、受け入れてくれる先生方がいるという安心感が本人の心の支えになったのではと思います。

(p)：人に対する悪い印象を持たなくなったこと。

(p)：一人で公共の交通機関の利用（特に乗り換え）に自信がついたこと。

(a)：「良い点は、公私のけじめっていうか、許される場と許されない場があるっていうのを教えるのに、あひるくらぶの存在はすごく彼にとって役立っているっていうか、私にもすごく助かる場面」「小学校ではきちっとしようねっていうのを、本人も今日はあひるくらぶで一生懸命遊ぶから、来週からまたがんばろうねっていったら、うんってしてくれるので、そこではげみになる。ものすごくスイッチの切り替えのなかで大きなオン、オフスイッチの際にあひるくらぶがあるような感じがします。」

(a)：「私は月に1回くる日に、x（子どもの名前）ってこだわりがなくって、私はみえて、この子、前に経験したこと覚えてるかどうかっていうのが、わからないことが多くて。多分わかんないんだろうなって思っているのに、あ、わかってるんだって思うことがある瞬間、たまにわかることがあって、そういうのがすごくうれしいんですね。あひるくらぶくるとき、月1回だから、xにとってはすごく久しぶりになるんじゃないかなって思っていて。くるときに、前ここで過ごした時間を思い出させて、コミュニケーションのツールにしようって考えて。どこか覚えているんだっていうのがちょっと伝わってくるので、そういうところがいい点だと思っています。」

(a) : 「普通の一般社会っていうか、健常者の世界だったら、もうそういうのはおかしいみたいな、理解されないことがたくさんあって、y (子どもの名前) のことが本当に普通じゃないみたいなのがなくて。そういうのが住む世界が違うんだっていうがすごくあって。ここにきたら本人の感覚とあったことを、とことん付き合ってくれるというか、感覚が一般的なあれと全く違ってて、そういう感じがあって。先生とかスタッフの方たちがとことん付き合っていて遊んでくれるし、あ、それでいいんだって (思った)」

(a) : 「悪い点…悪い点はちょっと今のところ思い浮かばない。やはりいろいろな体験をさせてやるっていうのが大事なんで、そのときにちょっと機嫌が悪くなったりとか、負荷がかかってしまって、暴れてしまったっていうのはあると思うんですけど、あまりそれを悪い点だとは、私は思わないんで、悪い経験だとは思わないんで、悪い点というのは、ぱっと思いつかないです。逆に、いい環境ばかりでいると、これから社会に出たときに絶対負荷かかるじゃないですか。だから今私とかだと、どれだけ負荷をかけて、どれだけびのびとやってられるかのバランスがわかりづらいので、そういうのもあひるさんとかの参加とかによっていろいろ考えたり、教えていただけたらいいなって思います。」

③ ご家族やお子さんにとって「あひるくらぶ」の活動への参加はどのような意義があるとお考えですか？ご自由にお書きください。

(p) : 月1回ながら長期間子どもの記録が残り、成長を明らかに第三者のさらに専門家(や卵)の目でしてもらえること。悩みや相談を専門家に伝えてアドバイスもらえたり、ともに考えてもらえること。子どもに家庭では支えられない活動を与えてもらえること。

(p) : 同じ悩みをもつ親子さん達と集うことで、自分達親子の居場所が見いだせた気がします。

(a) : 人と関わることへの抵抗感を極力なくせるかと思えますし、親にとっても悩みを打ち明けられる場なのでありがたいです。

④「あひるくらぶ」での子どもたちの思い出や印象深いエピソードがあれば、
教えてください。

(p): 学年があがるにつれて合える回数は減ってきているのですが、久しぶりに会っても違和感なく関係をもてるのはすばらしいと思っています。

(p): 息子が小学生の時、「お母さん、僕の用事はあひるくらぶを一番優先してね」と言われたことがありました。

(p): クリスマス会は特に小さい頃は親子参加でいつもとてもたのしかった。お料理のプログラムでつくってくれたものを一緒に食べたこと。

(p): 子ども達同士で仲良く、行動出来たことは嬉しく思います。以前、仁和寺での忍者修行など本人から自分で思った事や感じた事など、話してくれた事など。

(a): 去年のクリスマスに赤い帽子をかぶって外で楽しそうに雪遊びをしていたのが印象に残っています。クッキングもすごく楽しそうでした。

⑤「あひるくらぶ」への、今後の期待がありましたら、自由にお書きください。

(p): 外出の経験をサポートしてもらえるようになってうれしい。年齢に合わせて、親と離れて力をつけられるプログラムを期待する。大学生、社会人プログラム、ラーメンクラブ、自転車クラブ等々できていくとすばらしい。親の会は永遠に続いてほしい。

(p): 今までどおり、子どもにも親にも居心地のよい場所であってほしいです。

(p): 共通の趣味や興味を通じて、長く関係が続くようにフォローしていただきたいです。

(p): これからも長くあひるくらぶの存続を希望します。子ども達が社会へでたあとのフォロー（メンタル的な事）を出来る場所、本人達が話出来る会合というか年に数回催しものを通して出来れば…と。

(a): 今のままでも十分楽しそうですが、高学年のグループはどういった活動をされているのかもっと知りたいです。

(a): 「今いい状態できてて、あひるくらぶのスタッフさんとコミュニケーションと信頼とりながらかきて、最近友だちの名前とか出てくるようになって、今まではスタッフと y (子どもの名前) の関わりだったのが、お友達っていうの

をすごく気にするようになってきて。だからそのお友達ともこれから仲良く信頼関係築いてもらって、友達との関わり方を学んでいけたらいいなっていうのと、あひるくらぶでは本当に自由気ままにやりたい放題やってるっていう、その場も大事なので、ここはすごく貴重やし、それはそれでいいし、それはもう自分でこのあひるくらぶと他のところでは違うんだよっていうのをAさん（インタビューに参加していた別の保護者）みたいに教えていかないといけないんだなって、それも理解するようになっていくんだなってというのが、そう今感じたんですけど。あひるくらぶのなかの環境と外の環境があまりにも違いすぎて今のところはちょっと混乱することもある。ここで許されてることは外でもしてしまっただけで、怒られるとか、まだそこは教えられていないというか、つたえられてなくて。他のお母さんとくっいたらだめよとか、なかなか理解が難しく、人との距離感とかも気づいてくれたらいいなっていうのを。「人間的なスキルがまだまだ未熟だから、なかなか教えるって難しく。自分で気付いて経験たくさんしていけて、その経験を失敗しても許してもらえる今の環境とか年齢とかで、そういう時に学んでくれたらいいなって。」

(a)：「x（子どもの名前）の、こういう場、やりとりができるというか、安心できる場であり続けてほしいっていうのと、私のほうは、本当に今まで*を一点でみて、周りをみれていない状況で、みてきているので、しかもアメリカだったので、日本でどうやって育てていくのかっていうので、いろいろ知らないこととかいっぱいあったので、この会を通じてそういう情報を・・・（不明瞭）場があるというのを受けてくれたらそれでいいかなと思います。」

(a)：「あひるくらぶへの今後の期待は、まずこういう分野を学生さんたちが、学びに選んでくださって、貴重な休日をこういうのに費やして下さっているっていうのがすごくもういつも感謝の思いでいっぱい、こういう人たちがいるから私たちががんばってこれるので、是非あひるくらぶで学んだこととか、今の優しい気持ちのまま、現場にでたり、研究の道を進んでいただきたいなって。それでその道で幸せを感じてくれたらすごくありがたいなって思うので、これからも荒木先生のもとで学ぶ学生さんが増えたらいいなと思うし、優しい気持ちをもった学生さんたちが、これからも出続けてくれたらいいなとおも

ます。

⑥回答者（お母さんまたはお父さん）にとって、子どもさんの将来の夢を教えてください。

(p): 貯金等、お金の管理をできるようにさせてサポートを受けながらもより自立した生活を送ってほしい。相談できる人、心を許せる人、優しいパートナーを得てほしい。生涯、学習を続けて1つでもいいので、好きなテーマを研究してほしい。

(p): 人に迷惑をかけない大人になること。普通に就職して平凡な人生を送ってほしい。

(p): 普通に家庭をもち、普通に社会で過ごし、普通に仕事をしてほしいです。

(a): 娘はイラストレーターになりたいと言っているのですが、好きな物があってよかったと思っています。暇さえあれば絵を描いていて、先生にもほめられるみたいです。弟達はレゴ職人や宇宙飛行士になりたいそうですが、夢は持ち続けてほしいです。

(a): 「自分でできることを増やして、とりあえず自分で生活ができるようになってというのが、やっぱり目標ですね。どんな仕事とかっていうのは、将来パイロットになってほしいとか、お医者さんになってほしいっていう、そういうあれではなくて、どんな職業でもいいけれども、自分でしっかり働いて、ちゃんと自分で生活できるようになってほしいというのが、一応夢ですかね。まだうちの場合は何になりたいとかっていうのはわからないですね。こないだ、4年生の時に、学校の授業の一環で、将来の夢っていうのを発表するっていうのがあったんですけども。なぜかうちの子、冒険家になるっていつて。他の子はそんなん違う、もっと現実的っていうのかな。なんでそんなことができたのっていう。直前になんかみたんですかね…」

(a): 「将来の夢は、悲しい思いをしないことですね、まずうちの場合は高望み、何の職業についてほしいとかできないんだけど、どんな作業所であってもグループホームであっても、私たちと一緒に何かをするのでであっても、悲しい気持ちで毎日を過ごしてなければいいなって最近思っていて、いつもニコニコすごしているので、幸せに過ごしてくれていたら私たちも幸せなので。ストレ

スはね、病気のもとですし。親子で仲良く暮らしていきたいです。」

〔a〕:「x(子どもの名前)が大きくなった時の夢っていうのは、今全然持てない状況で。さしあたり、もう少しでもxとやりとりができたらって、それをめがけて毎日生活しているんですけど、簡単でもいいから会話らしい会話ができる日を待っている状況です。」

⑦その他：ご自由にお書きください。

〔a〕: あひるくらぶに入って、他のお母さん方と話して、共通の悩みや勉強になることを聞かせていただいて本当にありがたいです。勇気づけられることもあります。

〔a〕: (あひるの活動で“こだわり”に付き合うことについて)「私からみたらこだわりのなかに入ってしまうんじゃないかって、ずっと砂でもこんなしてたら、ずっとしてるような子だったので。だからちょっと心配になったんですけど、それを抜けたらすごくかわってきたので、すごくありがたかったです、よかったなって。でもそれを通して人を好きになって、人をすごく今好きで、本当に誰にでもあひるの方みたいに話しかけて同じように返してくれると思ってて、だからすごく人間が好きで誰にでも話しかけていいなって思ってたんですけど、だんだんちょっと成長するにあたってちょっと人との距離感がすごく近いのが、最近やっぱり成長して体も大きくなって、男の子らしくなってくると、すごく距離感が近くて、私の友だち、他のままさんとかでも、わーって抱きついていたり、あひるの人たちと接している感覚でみんなにしてるから、ちょっとその辺だけは、この辺からの課題だなって。」

〔a〕: (入会当初の先輩お母さんの印象について)「あとお母さんの元気さ。(中略)もう自分の子どものことをほめられるので、いいところを見つけて。うちの子かわいい、うちの子こんなができたって。特別支援学級いってられても、こんな前向きで楽しいこといっぱいあるんだっていうので。そこで、自分の子、自閉のなかでもまたさらに遅れているんだっていうのがっかりした気持ちと、こんなに前向きになれるんだっていう期待で。なんかすごく複雑な気持ちでした。」

(4) 考察

あひるくらぶへの期待としては、子ども達にとって安心出来る場、苦手なところをフォローする場、友達との関係を築く場等となつてほしいという願いが聞かれた。また子どもたちだけでなく、親にとつても普段語れない思いを語れる場、共感が得られる場としてあひるくらぶが貴重な存在になっていることがうかがえる。他に、あひるくらぶが日常の一部になっており、そのなかでの子ども、保護者双方の変化を感じられていることがわかつた。今後のあひるくらぶへの思いとしては、子ども達の活動、親の会ともにその時期ごとの課題に寄り添うものになってほしいと願っていることがうかがえる。

おわりに

アンケート、インタビューに協力してくださつたスタッフ、保護者のみなさん、お忙しいなか回答していただき、本当にありがとうございます。突然で、しかも締め切り直前でのお願いとなつてしまい…申し訳ありませんでした…。

今回みなさんの声を集めさせていただき、荒木先生がよく言つておられる「たかが月一回、されど月一回」という言葉を思い出しました。本当にそうだなあと…笑。月に一回だけの活動ですが、子ども達や保護者・ご家族の方にとっては日常の一部であり、かつ大きな存在となつていること、スタッフにとっては、あひるくらぶでの活動が現在の仕事や研究の土台となつており、実践に活かされていることが伝わってきました。またあひるくらぶでの出会いが、それぞれにとって生涯の付き合い、仲間になっていくのだと感じ、とても嬉しく思いました。これからもそういう場として、進化しながらもあひるくらぶが続いていてほしいと思います。

ここでは紹介しきれなかつたみなさんの思いがまだまだあります。またどこかで紹介させてもらおうと思います。改めましてアンケート、インタビューに協力してくださつたみなさん、本当にありがとうございます。

なお、アンケートおよびインタビューの内容は一部、誤字・脱字の修正や、文意が伝わるように加筆をさせていただきました。

(文責：富井奈菜実)